

*日本人の桜文化

長かった冬がようやく終わり、春がやってきたことを告げるかのように満開に咲き競う桜。桜の花は、入学や入社など人生の門出を飾る花として、日本人の心に鮮やかな印象を残してきました。

桜は日本だけに在るわけではなく、全世界には100種ほどもあり多くの国にも分布します。他国では桜は「サクランボ」のなる樹、花木よりは「果樹」として見られており、花を愛でる習慣は殆どありません。また、「花見」という言葉は外国語にはみあたりません。

以下、いろいろな文献から日本独自の文化である「花見」についてパクってみました。一読下さい。

*神話の時代から桜は、はかなく美しい存在だった

日本人と桜の縁は非常に古く、『古事記』や『日本書紀』では天孫降臨した天照大御神の孫・邇邇芸命（ににぎのみこと）に求婚される美しき木花咲耶姫（このはなさくやひめ）が、はかなく散るものの象徴（＝桜の花）として書かれていて、桜という名称は「咲耶」から転じたという説があります。

また、民俗学においては、田の神を意味する「さ」と神の御座の「くら」が結びついたという説があります。満開の桜には田の神が宿り、田植えから収穫まで見守ってくれるありがたい存在として、農耕民から崇められていたのです。昔々、田の神様は普段は山の上にいると信じられていました。その神が春になると山から降りて来て桜の木に宿ります。すると、その桜の木は開花すると考えられたのです。古代の人々はそんな桜の木に供え物をし、丁重に祀りました。祀りの儀式が終わると、供え物（お酒や食べ物）を皆でわけあい、飲み食いしたのです。じつは、これが本当の花見の起源といわれています。

*桜、梅の後塵を拝す

奈良時代になると大陸文化の流入によって、中国で愛好されていた香り高く色鮮やかな梅が貴族の間でもてはやされるようになります。それは『万葉集』に詠まれた歌の数にも表れていて、桜の歌が43首、梅の歌は110首。いかに梅が当時の人々の心をとらえていたのかよくわかります。

奈良時代の花見は、梅の花の美しさを鑑賞することが本来の目的ではありませんでした。梅の花には魔除けの力があると信じられていました。舶来品である梅を愛でることは貴族たちにとってステータスだったのです。そのため、奈良時代の花見は、厄払いの儀式的な意味合いが強かったといわれています。

しかし、庶民にとって春の花といえば、やはり桜。田の神が宿る木であり、農耕の時季を知らせてくれるありがたい花として、決して欠かせない存在だったのです。

*平安時代、桜が梅に代っての天下を取る

遣唐使が廃止され、国風文化が花開いた平安時代になると、支配層における梅と桜の立場も逆転します。なぜ嵯峨天皇の時に「梅→桜」という変化がおこったのでしょうか。きっかけは、嵯峨天皇が地主神社に植えられていた桜をたまたま見かけて、そのあまりの美しさに魅了されたからだといわれています。紫宸殿に植えた左近の梅が、仁明天皇によって桜に植え替えられたことも手伝って、貴族たちは桜を貴ぶようになったのです。文献に最も早い花見として登場するのが「日本後記」という朝廷が編纂した歴史書においてです。そこには嵯峨天皇が812年3月28日に神泉苑（しんせんえん・京都にある寺院）

で、「花宴の節（かえんのせち）」を催した。と書かれています。これが記録に残る最初の花見とされています。それ以降、桜の花見は天皇主催の定例行事として取り入れられるようになり、皇族や貴族などの上流階級のあいだで定着していったのです。その様子は『源氏物語』の「花宴（はなのえん）」に描かれています。京都の東山などに桜が植えられ、現在にも続く花見の名所が誕生していきました。

*平安人の桜 LOVE を今に伝える数多くの和歌

・世の中にたえて桜のなかりせば春の心はのどけからまし

これは平安時代初期に成立した『伊勢物語』の主人公・在原業平が、桜によって心が乱されることを詠嘆した歌。「世の中にまったく桜というものがなかったなら、春を平和な気持ちで過ごせるだろうに」という歌を詠みました。先人達も桜の開花に心躍らせたり、散りゆく花びらを惜しんだりしていたことがわかります。

・ひさかたのひかりのどけき春の日にしづ心なく花の散るらむ

これは『小倉百人一首』で紀友則が桜の花の盛りの短さを惜しんだ歌。

・花の色はうつりにけりないたづらにわが身世にふるながめせしまに

同じく『小倉百人一首』で、美貌で知られた小野小町が衰えゆく容色を桜に重ねて詠んだもの。

・ねがはくは花のしたにて春死なんそのきさらぎのもちつきのころ

これは桜の名所・吉野に通いつめ、桜への想い託した歌を数多く残した西行が、死ぬその時まで桜を愛でていたいと切望した歌。

これら平安時代後期から鎌倉時代にかけての3首に「花」と詠まれているのはいずれも「桜」のこと。この時代に桜は花を代表するような圧倒的な存在になっていたことがわかります。

鎌倉時代も桜好みは受け継がれ、吉田兼好の随筆『徒然草』には、貴族が桜を上品に鑑賞するのに対して、上京したての田舎者は酒を飲み連歌をして大騒ぎをしていたと書かれています。

*秀吉の大規模な花見がのちの宴会行事のモデルケースになる

そして、安土桃山時代になると、豊臣秀吉による大がかりな花見が世をにぎわせました。

・文禄3（1594）年の「吉野の花見」は、大坂から1000本もの桜を移植した吉野の山に、徳川家康や前田利家、伊達政宗など有力武将そして茶人や公家など総勢5千人を伴って行われました。5日間も行ったというかつてない盛大なスケール。

・続く慶長3（1598）年の「醍醐の花見」は、醍醐寺に700本の桜を移植し、嫡男の秀頼を始め北政所や淀殿、そして諸大名の女房女中など1300人を伴って茶会や歌会が催されました。

・秀吉が催した大花見会を機に、花見は宴会行事として定着。それに伴って京都の寺社や山々には桜が植えられるようになったと伝わります。また殿舎や庭園に至るまで大規模な改修・造営も行われたそうです。醍醐寺は現在、世界文化遺産にもなっておりその境内には、春になるとソメイヨシノや八重桜、枝垂桜に山桜などが咲き誇ります。天下統一を果たし、戦のない活気に満ち溢れた明るい世の中であり続けたいという秀吉の思いが込められた盛大なイベントともいえるでしょう。

この大規模なイベントにより花見というものが庶民にも伝わり、江戸時代には花見がごく一般的な春の行事として根付いていったようです。

* 暴れん坊将軍が桜の名所を江戸各所につくった

江戸時代に入ると 3 代将軍徳川家光が創建した寛永寺に吉野の山桜が大量に移植され、江戸で初めての桜並木が出現します。その後、8 代将軍吉宗は庶民の行楽のための桜の名所を江戸の各地につくります。そこで催された花見の宴では身分を問わず無礼講が許され、江戸庶民は花見を心待ちにして、桜に対する思い入れを深くしていきます。それにより、江戸中期の国学者・本居宣長の「敷島の大和心を人問わば朝日ににほふ山桜花」の歌のように、桜は日本人の心の象徴とされるようになったのです。

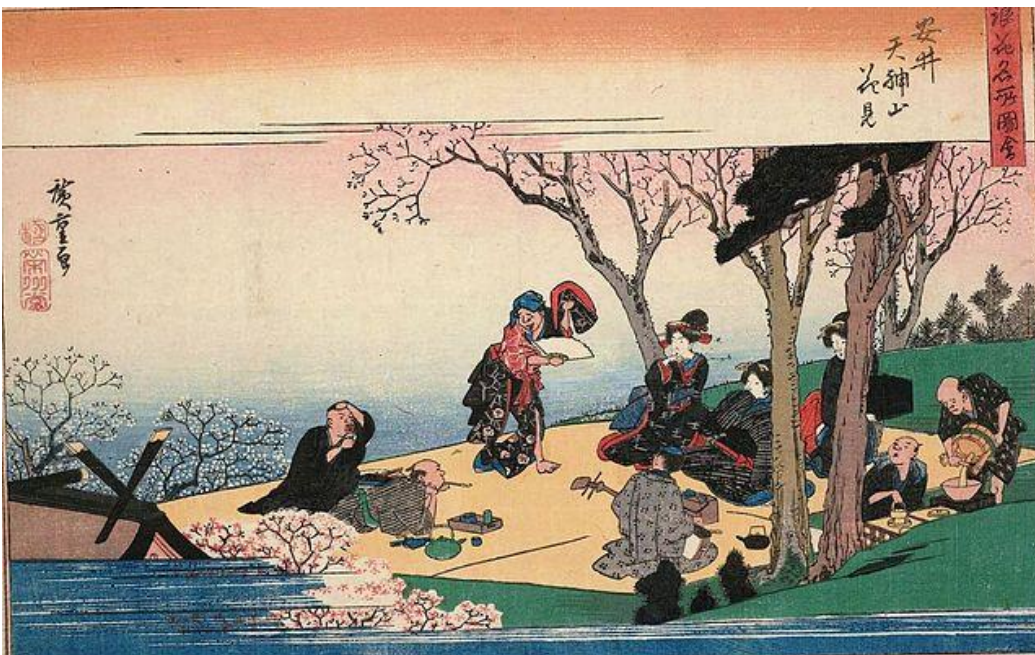
なお、江戸時代から花見には桜を鑑賞しながら団子を食べる習慣がありました。この三色団子を「花見団子」と呼び、白は雪の色で冬の名残りを表現、またピンクは桜と春を表し、緑はヨモギで初夏の訪れを感じさせるという意味があります。現在でも桜の名所などでは、この花見団子を売っているお店があります。また同じように花見のお供として現在も人気が高い花見弁当。重箱に入ったタイプの物が一般的で、春らしい彩り鮮やかな食材を利用して花見の気分を盛り上げます。

* ソメイヨシノとともに日本全国に花見が広がる

桜にとってさらに大きな出来事が、江戸末期から明治にかけての品種改良によるソメイヨシノの誕生です。従来の山桜の花弁は白く、花と葉が同時に現れるのに対して、ソメイヨシノはほんのり紅をさした花だけが先に開き、いっせいに散り、その様子は華麗そのもの。ソメイヨシノが全国に植えられることによって、桜の美しさやその意味は全国に広がったのです。

桜を愛でる心は、昔から変わらない日本人の風習・文化でもあります。桜を見ることで春を感じ、気持ち癒され、日本に住む良さを改めて実感します。現在でも持ち帰るために桜の枝を折ったりするのは良くないことだと考えられています。秋のもみじは「狩る」でも春の桜は「観る」それは日本人の中に、桜は「神が宿る神聖な木」だと信じる心があるからなのです。

春の一時期だけしか見られないにもかかわらず、日本人にとってこの上なく大きな意味をもつ桜。その理由は、人々の暮らしに密着し、心に寄り添い続けてきた記憶の継承にあります。だからこそ桜は今も日本人にとって最もなじみ深く、特別な存在となり得ているのです。



江戸時代の花見の様子。歌川広重「浪花名所図会 安井天神山花見」

以上